山陽新聞を読んで

「アオハル」の風

AMDA理事　難波妙

「アオハル」って知ってますか？とAMDAのスタッフに聞かれた。「何、それ？」と私。「青春」を訓読みし、さらに「みずみずしさ」や「エネルギッシュ」など、思春期をより一層連想させる言葉だそうだ。高校野球のマネジャーをしていた20代スタッフが、甲子園の応援や文化祭で、仲間と一体となってはじけるあの高揚感ですよ、と説明してくれた。私が「アオハル」だった頃を思い起こすと、岡山では「燃えろ岡山　県民運動」が掲げられていた。

「アオハル」世代の活躍を取り上げた山陽新聞の記事から、彼らの主体性に基づいた感性の豊かさが社会を動かしていると感じる。7月31日付の社説では、岡山県和気町のまちづくりに、当事者である佐伯小の児童の声を反映することで地元に活力が生まれた好事例を取り上げ、8月27日付の文化面では、操山高の生徒が小中学生を対象に、美術で質の高い教育を提案した企画を紹介している。指南した岡山県立美術館の学芸課長の「自分たちに必要な学びは何かを考え、大人たちに突きつけている」という一言が、彼らの思考力の深さを物語っている。

これまでのAMDAの活動の中で、私自身が高校生から学んだことも多い。

2018年、西日本豪雨災害の際、総社市の災害対策本部のメンバーとして、支援物資の配布を仕切る高校生ボランティアがいた。正しい状況判断が求められる中、高校生の何も足さない、何も引かない報告は、気持ち良いほど潔かった。今年8月、ネパール研修に参加したAMDA中学高校生会のメンバー2人は、他者理解をしようとする志を世界中が持つために国際的に働きかける人になりたい、減災や復興まで含めた日本の防災をその国に特化した独自の防災に発展させ「Bousai／ボウサイ」として世界の共通語にしたい、という新たな夢を描いて帰ってきた。

かつては、将来の夢は？と聞かれたら、多くは職業を答え、先達がつくった社会と評価に適応するよう努力した。しかし、今の若い世代は、自らの価値観で新たな社会を創り出しているように映る。

8月27日付山陽新聞4面の編集ノートでは、甲子園で優勝した慶応高ナインが吹かせたような「多様性」の新しい風が、政治の世界の旧弊を打破し、その景色を変えてくれるのではないかと期待を寄せている。そんな「アオハル」世代の風は社会を大きく変化させ、きっと私たちの見たことのない世界への追い風となるだろう。山陽新聞がこの「アオハルの風」をどのような感性で捉え、表現していくのか、その切り口に注目したい。

「山陽新聞を読んで」は月2回、日曜日に掲載します。